

祇園祭と女性の関わり

8班メンバー

三好 美咲（京都大学文学部1回生） 野々山 千晴（京都大学法学部2回生） 正田 愛実（日本たばこ産業 株式会社）
山田 千聖（京都大学農学部2回生） 吉井 英雄（京都大学経営管理大学修士課程1回生 / 公認会計士 / 四条町大船鉢囃子方 代表）



↑調査メンバー

背景・目的

一部の山鉾を除いて女性は山鉾の上には上がれること、山鉾巡行の曳手やお囃子方に女性がいないこと、祇園祭の運営に関わる各団体の役員が男性ばかりであること、等から私たちは祇園祭に「男の祭」のイメージを抱いていました。

SDGsには「ジェンダー平等の実現」や「人の不平等をなくす」というゴールがありますが、一見すると祇園祭は男女の平等性には欠ける祭のようにも見えます。しかし祇園祭が1000年以上続いていることも事実です。

これまでの祇園祭と女性の関わり方について調査を行い、祇園祭の持続可能性を支えているものは何なのか考察していきます。

実施内容

<文献等での調査>

<取材>

- 放下鉢保存会理事長 川北 昭様
- 編集プロダクション有限会社アリカ編集者 永野 香様
- 南観音山保存会評議員 小島 富佐江様
- 祇園祭山鉾連合会顧問（元理事長）深見 茂様
- 平成女鉢清音会会长 小柴 啓子様



←花傘巡行の様子

リンク : <http://kyotomoyou.jp/gionmatsuri-hanagasa-20160724>

結果（取材先での声）

■ 祇園祭では女性が活躍する場が多くある

- 花傘巡行や鶯踊り・雀踊り、稚児の化粧、装飾品の職人 etc
- 山鉾巡行も当日目立つのは男性だが、女性の下支えがあってこそ成り立っている

■ 持続させるために、急激な変化を起こさない

- 祇園祭は、例年と同じように執り行うことで続けてきた。続けるには急激な変革は無い方が良い
- とはいっても時代の流れで変わらざるを得ない部分もあり、必要に応じて変化を遂げてきた

■ 祇園祭では皆が自分の役割をわきまえて全うしている

- そもそも祇園祭は町内のヒエラルキーによる役割分担が明確な祭
- 町内での不要な争い・諍いを避けて続けてきた



↑永野さんへのインタビューの様子

■ 地元の人たちは、祇園祭を守り引き継いでいかなければならないという責任感がある

- 全国から見物客が訪れるが、結局は地元の祭である
- 外の地域の人から様々な意見が挙がることもあるが、続けるためにどうするのか、保存会や町内会の人たちで決めていく必要がある

考察・提言

- 男女平等は“ゴール”ではなく“手段”
- 男女で役割を分担したから祇園祭が持続したという側面もあります。毎年繰り返される祇園祭ですが、繰り返すことが難しくなった時に取られた手段の一つが、お囃子等で女性が今までと違う役割を担うということ。“男女平等のため”ではなく、“祇園祭の持続のため”の女性参加なのです。
- SDGsも同じ。SDGs自体がゴールなのではなく、社会を持続させていくために、SDGsが掲げる事柄を実行していく。“何が目的か”を見失わないことが大切です。